古書熱“鹿肉元気”の誘惑

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久松, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7300

古書熱　“鹿肉元気（しかにくげんき）”の誘惑

久松　健一*

私事にはじまり

アメリカ発の不況の嵐が世界を丸呑みする直前、平成 20 年 10 月初旬に引越をした。部屋が手狭になったからだ。腹まわりが加齢とともに育ってきたせいではない。本の増殖が理由である[1]。小規模な古書店に負けないぐらい書物が増えて、食卓もリビングも占拠される羽目になった。

かつての拙宅（食堂兼リビング）

* ひさまつ・けんいち／明治大学商学部准教授／フランス文学・思想、フランス語教育

[1] 植松長一郎著『書物の周辺』によれば「『本』という文字の本来の字義は木の根もとで、物のもとになる大切な部分、つまり根本、基本を表わす」とある。どおりで、根を広くひろげるはずだ。とすれば、植え替えも必定であろう。

その惨状を伝える筆力がないので、視覚に訴えたい。前掲の写真、転居前の我が家である。手前左側、ティッシュの箱が乗っている場所は食卓テーブルでそれなりの大きさ（縦 80cm×横 120cm）なのだが、ご覧のように空いているのは皿 2〜3 枚のスペース。ぐるりは書籍がはびこり、繁茂して、この有り様だ。壁芯 45.13 ㎡のワンルームは、ベッドの上と風呂場以外、本が鎮座していた。女性編集者がこの写真を見て「わ〜、本だらけ！ なんだか気持ち悪い！」と叫んだ。尋常ではないらしい。

学生時代から住空間の狭量と書籍の場所確保という答えのないジグソー・パズルに悩まされてきた。2 階の床が傾いだこともある。冬のある日、不意に単 1 電池が目の前をゆっくりと動きだし、瞬時にそれと悟った。以前から枕の向きをさかさにして寝ると頭に血がのぼるような、妙な違和感はあった。だが、置いてあった電池が勝手に転がろうとは。もちろん慌てて越した。荷物をトラックに積んでみてわかったのだが、2 トンロング車 2.5 台分の書籍が 12 畳の洋間と押し入れに天井まで詰まっていた。

また、郵便受けが小さいと配達員から指導を受け、高さが 1 メートル近くある鉄の箱を玄関脇に設置したこともある。ところが「妙なものを置かないでください」と近所のおばさまから注意された。毎日のように送られる書籍小包（現在の“ゆうメール”）が小さな郵便受けに入らなかったせいなのだが、不気味な器と思われたようだ。新興宗教の話題が巷にあふれていた頃の話である。

こんな古書がらみのトラブルが生じる主たる要因は、“鹿・肉・元・気”すなわち「私家本」「肉筆」「限定本」「稀覯本」のせいである。

手持ちの金子（きんす）は限られているが、なんとか融通しつつ本を買う。研究者の端くれとして専門書を購入する。もちろんのことである。しかし、好事家として元気な鹿肉も購う。いや、鹿肉こそが、購買欲をそそりたてる。本能の血をたぎらせる。パチンコや競馬・競輪などの賭け事があおる射倖心に似て、しかるべき獲物を見つけると“モルヒネ＋アドレナリン”が体中にどっとあふれる。危ない薬にも似ている。「蒐書に熱をあげすぎて玩物喪志の弊に陥らぬこと」、そう先達は宣（のたま）うが、そんな御託宣はとっくに頭

から消えさってしまっている。

たまに要らなくなった書籍を売ることもある。しかし、購入額の 10 分の 1 程度の涙目の取引きが少なくない。本はそれを購入した瞬間に価格が規格を外れ、賞味期限が切れるようで、たとえば 10 数万で買った貴重な書簡でも 1 万数千円でしか売れない。古書店の親爺に「いまどき切手を集める子どもはいないでしょ。だから切手は売れません。いまどき手紙や原稿を買う若者は稀でしょ。だからこうした紙ものは売れませんわな」と諭される。さりながら「売れませんわな」と言いつつ、数ヶ月後に送られてくるその店の古書目録では、件の書簡にちゃんと数万の値が記され写真付きでうやうやしく売られている。古書はプロの手に渡った瞬間から価格が再生して、規格内に戻り、賞味期限のラベルが新たに貼りかえられるものであるらしい。

愚痴はこれくらいにしよう。拙宅の「鹿肉元気」を紹介するのがこの場の目的であるからだ。ただし、先を読まれる奇特な御仁に一言ご注意申しあげたい。素人の古書エッセイの類はすべからく「私事にはじまり私事に終わる」ということ。しかも、それは辞書の定義を外れた“他人にそっと知られたい「私事」”というなんともゆがんだ心理であるということを。

鹿　私家本

自費で数 10 冊、あるいは 50 部足らずの本を作り、書店の流通ルートには乗せず、知人たちに配る。配るとは言っても、政治家や財界人が自らの半生を書き記してパーティーなどでばらまく饅頭本とは違う。かつて澁澤龍彦が「みずからを売らず」というタイトルの短いエッセイ（この原稿は額に収まりわが書斎の一隅を照らしている）のなかで「完全な無名性のうちに好んで逼塞している」と記したような、目立たず、奥ゆかしい姿勢。表立って報われることを期待しない書籍のことである。

架蔵しているなかで価値ありと判断する私家本を選べば、まず、古書・書誌学の大家、並外れたスケールの書物コレクターとして知られた人物にまつわる珍本があげられる。『庄司淺水著作目録』と題された小冊子がそれ

である。編集したのは書物の論客、ご意見番たる谷沢永一。見返しに「本冊は庄司淺水先生の古稀の寿を記念し祝賀の会参加者に頒つため拾部を限り刊行するものである」とある非売品である。写真を 6 葉貼りつけた箇所が 3 ページ、書誌が 13 ページ、新書よりひと回り大きなサイズの和紙の袋綴、紐綴じ。天地の余白の配分は、書物の美を追求したウイリアム・モリスにならったとおぼしき黄金比。天に比べて地が広い。刊行年は昭和 48 年 11 月 10 日、大阪詠品会と奥付に記載がある。『浪速書林古書目録（第 43 号）』で見つけ、5 万円＋税で購入した。限定 10 部という稀少性から「現在まで市場に出たことのない稀本」と目録に記されている。この本の存在は前々から知ってはいたが、まさか入手できるとは思ってもみなかった。丁寧な包装で自宅に送られてきたときには、手が震えた。

もうひとつ拾えば、『愛の魔術』『降霊魔術』という 2 冊の研究書で有名な日本悪魔学の草分け、エロティック文学の世界でも知られた酒井潔の生涯と書誌を追った限定 25 部、『書物が語る　談奇人・酒井潔』があげられる。これは最近、ぐろりあ会という古書展の目録で注文、購入したものだ。著者は本多眞なる人物。ただし、奥付を見ても住所が載っているだけでこの著者の素性は明らかではない。書物の厚みは電話帳程もありながら、和製本という凝った代物（この厚みの和装丁は作製がことのほか難しい）。内容は濃密である。著者の並々ならぬ努力が行間にあふれ、学術的な文体ではないものの、学位請求論文にも劣らぬ労作と言える[2]。

この本、のっけから誰にいかなる教えを乞うたのか、謝辞が事細かに 3 ページにわたって記されている。この文言が表層的でなく、卑下自慢の類の嫌味もさらさら感じられない。たとえば「愛書家で限定本研究家の高橋

[2] 澁澤龍彦は酒井潔の 2 冊に触れ「ヨーロッパの神秘主義や魔術について勉強しはじめるに先立って、何はともあれ、この酒井潔の二著を座右に置いたという経験がある」と語る。また、本多は酒井のことを「大正末から昭和初期の短い期間、わが国の『奇』を好む文化風俗に大きな影響を与えたモダニスト」と紹介している。その一方で、書物を通じてではなく、実際に酒井と暮らした奥様の言葉が印象的だ。「結婚の晩に、“僕は水だ。沸騰しない小川の水だ。そのつもりでいて呉れ”と言われました。その意味が亡くなってから判りましたよ。本当に静かな水のような人でした」。なお、本多眞氏は、現在「廃墟」と題した HP を主催している方のようだが、詳細はつかめていない。

啓介氏からは秘蔵とされた『愛の魔術』二十部本と『魔女』肉筆彩色本の二冊を遠方より快く貸与していただき、記述の具体性と写実性を一挙に高める破格の後援を賜った。また、氏の多年にわたる労作『蒐書三昧』の各巻は、理想的な書誌として本書執筆の方向性を決定づけた」といった具合である。“我の業績なり”と自らを売る人ばかりがはびこる世の中で、この書き手の姿勢には頭が下がる。そして、著者が酒井潔にどれだけ惚れこんでいたかがよくわかる。本文を少し引用しておきたい。

> およそ肉体労働とは無縁な痩身で、しかも事務屋のように曇った目もしていない。たっぷりと生地を使ったダブルのスーツはシーム・ラインも見えない最高級の技巧で仕立て上げられている。ワイシャツはネクタイなどという野暮はせずスカーフで柔らかく胸元を飾り、共地のポケット・チーフをわざと畳まずに胸ポケットから垂らしているところなど、とてもそこらの腰弁ふぜいの真似のできるセンスではない。胸を張って悠然と市電の線路を跨ぎ越してゆく足取りには、一点曇りのない自尊心が窺われた。
>
> 酒井が何をして食べているのか、誰ひとりそれを知る者はいなかった。宮仕えでないことは見当はつくが、あまりにも金のかかった装いを見せつけられては画家だという自己紹介を信ずる人すらいなかった。おまけに興が乗れば悪魔召喚の秘術だとか媚薬毒薬といった、一般教養の範疇をはるかに逸脱した奇怪きわまる話題を、それこそ微に入り細を穿つ蘊蓄を以て飽くことなく繰り広げるのだ。

ちなみに、酒井潔がらみでは知る人ぞ知る豆本も所蔵している。『酒井潔覚え書』（吉田昂生著：1972 年／限定 300 部）という小品である。ただし、その中身は、名古屋時代の酒井潔を巡るいくつかのエピソードに、かなりラフな書誌もどきを添付したもの。ファンの間では垂涎と言われる一冊らしいが、正直、中身と古書価は釣りあっていない。

肉　肉筆原稿・書簡の類

肉筆原稿や書簡は、かつてレコード収蔵用に作られた立方体の細かな仕切のある家具に入れて置いてある。名の知られた作家の草稿をピックアッ

プすれば、遠藤周作、串田孫一、矢代静一、椎名誠、中井英夫など。国文学者ではアイヌ語や日本語の研究で知られる金田一京助、古典文学研究者の久松潜一（ちなみに小生の親戚筋にはあらず）、植物学の牧野富太郎、フランス文学者では辰野隆、佐藤朔、山内義雄、高橋邦太郎らの原稿を所蔵している。書簡は、たとえば、アナトール・フランスの達筆な一葉（ただし受け取った相手が不明）、アンリ・ベルクソンの編集者への律儀な返答、それにヘンリー・ミラーが綴った情愛にあふれる私信などが自慢の種で、文箱にしまってある。日本人の書簡としては、昭和初期に刊行された雑誌「書窓」（恩地孝四郎編集：アオイ書房刊）が創刊 1 周年記念の際に定期購読をしていた著名人たちから集めたアンケート葉書の返信の束、それが珍品と呼べそうだ。太いペンを使う詩人の日夏耿之介、その字を少し乱雑にしたようなペン字の書物研究家・斎藤昌三、律儀で丁寧な文字を記す書物愛好家の岩佐東一郎、岩佐のそれに繊細さを加えた字が特徴的な書誌学者の長澤規矩也[3]、ほかに英文学者の竹友藻風やイリーンの翻訳で知られる玉城肇らの返信が手もとにある。合計 30 枚ほどである。

なお、書簡ではないが、「仏蘭西共和国から勲章を拝受するべく渡仏したい」との意向を東京府知事宛に墨筆で記した届出書は、フランス語を生業としている者には価値ある半紙と信じたい。仏語事始を語る上で欠くことのできない辞書『佛語明要』（元治元年・1864）を著した村上英俊の筆になるものだからだ。

原稿でも書簡でもないものの、肉筆の珍品としていささか反り身になりたい品もある。湯浅半月の手になる掛け軸、楔形文字[4]とシーサーとおぼしき動物（あるいは虎・竜かもしれぬ）の描かれた不思議な味わいの一幅である。湯浅は古書業界では高値安定の長編叙事詩『十二の石塚』を物した

---

[3] 余計な世話と言われそうだが、長澤は論文に添えられる「註」の文字を嫌った。「注」が正しく、要らぬ権威づけで「註」の字を用いる必然性なしとした。小生、これを知ってから「註」の字は使えなくなった。

[4] 半月は同志社大学の徽章をデザインした人物。正三角形を三つ寄せたマークはアッシリア文字の「ムツウ」（国や土を意味する語）の図案化。半月は、エール大学留学中に、ヘブル語、アッシリア語、アラビア語、シリア語、アラメック語を専修したという兵（つわもの）である。

半月の自筆文字（今まだに判読できず）

人物で、現在の群馬県安中市の出身。かつて、その近くの短期大学で職を奉じていたときに、『十二の石塚』を図書館が 80 万円で購入する話が出て、県内有数の古書店に短大の代表代理として実物を見に行った経験がある（ただしこの本、復刻版なら神田の均一台で買える）。そんな過去があったせいで、この軸がネット・オークションに出された際、何かの因縁、親の因果が子にたたりとばかりに、ままよと札を入れた。幸い落札できた。しかしながら飾るに適した場所がないまま、押し入れの奥にしまっている。しかり、これ死蔵である。ただしまっておくだけなのにそれを入手したいという感覚は、書物の類を読むもの、研究するものとまっとうに捉えている方たちには分かってもらえまい。この点にからんで、以下のようなリトマス試験紙もどきもついてまわる。

「これ全部読んだの」[5]「こんなものどうするの」―こうした心ない人の肺腑をえぐるような愚問を発するか否かで、その人物が当方の味方か敵かを容易に判別できる。ちなみにこの楔形文字を読もうと古代文字研究の本を購入、しかしいまだに解読できずにいる。まさに「こんなものどうするの」である。

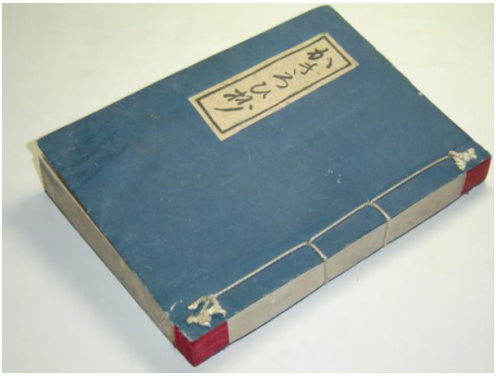
元　限定本

私家本と限定本はときにかぶる。しかし、前者が人に知られず逼塞という言葉がふさわしいワビ・サビの世界に潜んでいるのに対し、後者は、その存在を知られてはいるものの数が少ないためにマニア垂涎となるような、いわばでしゃばった本が多い。そのため、限定本はややもすると押しだしの強い豪華本ともなりかねず、いたずらな装丁で書物としての機能を逸脱するケースもないではない。たとえば、我が家には青園荘こと内藤政勝の改装本が何冊かあるのだが、本に宝石（瑪瑙など）を埋めこむという体裁の造作で趣味はあまりよろしくない。斎藤昌三が得意としたゲテ装本（簑虫、海苔、番傘等々で装丁された本）も持ってはいるものの、函から本体を出すたび気が気でなく、「読むこと相成らぬ」という本末転倒の声が聞こえてきそうだ。そんななか、普段はガラスケースに眠っている和装本の『かぎろひ抄』と洋書『JAPAN』は貴重な限定本である。

前者は、花浦みさを唯一の歌集、与謝野晶子の『みだれ髪』を凌ぐとされる幻の一冊である。中央公論新社から平成 13 年に復刊された。手もとにあるのはその元版、奥付に「昭和拾九年壹月五日印刷」とある。ただし、どこにも限定の文字はない。だが、これは詩人であり造本家としても知られた西川満が台北でこさえた限定本。洋装本が 200 部、判型を変えた和装特別本は 75 部と少部数しか作られていない。しかも中身は「砲烟弾雨の

[5] ナポレオンなら別かもしれない。彼は一時間で一冊本を読んだという。読み終わるとそれを廊下に投げ捨てる。下僕が毎日その本を片付けるのだそうだが、いつも一抱えはあったと言われている。なお、セント・ヘレナに流刑中、8 千冊近く本を集めたという。このときナポレオンは皇帝ではない。破格の待遇は受けていたろうが、あくまで囚人である。

危険に、身をさらしつつ、焦土の戦陣に於いて書かれた」ものであり、印刷された本の「大部分は今も台北に、放置されたままであつて、各地に寄贈したものも、殆ど郵送の途中で沈められ、落とされ、ろくに陽の目を見ぬ哀れな集となつた」（中央公論新社版：解説）。しかり『かぎろひ抄』の元版は、戦火をくぐって今を生きる貴重で稀なる限定本なのである。拙宅の和装本にはかすかな水濡れがあり、紙魚に食われた跡もある。状態は悪い。しかし、それだけになおさら貴重である気がしてくる。砲火をあびながらも、はるばる海を渡って来たと、ひしと感じとれるからだ。なお、本書から自身の気に入りを引けば、次の一首。



『かぎろひ抄』（和装本）

あがうなじに冷たくふれてばら散りぬ　儚なき夢のさめしたまゆら

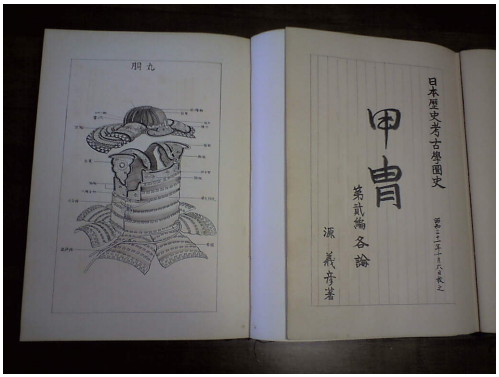
後者は図書館などの公の場所で特別扱いを受けるに値する限定本と信じたい。タイトルは **THE WORLD IN MINIATURE: JAPAN: Containing Illustrations of the Character, Manners, Customs, Religion, Dress, Amusements** で西暦 1823 年（文政 6 年）刊行、著者は Frederic Shoberl である。関心の向きは http://www.kufs.ac.jp/toshokan/50/shob.html あるいは http://shinku.nichibun.ac.jp/gpub/book/g0151.html を見ていただければ、本書の氏素性は調べがつく。おそらく日本に数冊しかないのではないだろうか。ちなみにネットで古書価を調べれば、米弗で 1,663.00 とあり、12 折りの冊子が少々の円高でも 10 万円は下らない計算になる。ただし本書、『日本』と題されていながら、色鮮やかな挿絵はどうみても「中国」あるいは「東南亜細亜」のもの。登場人物の面差は大陸風だし、服装や手にしている道具も日本のものとはどこかここかが違う。かれこれ 180～190 年前、世界の日本国への認識がせいぜいこの程度であったのかとよくわかる中身だ。だが考えてみれば、これ

も致し方なし。ペリーがアメリカの艦隊を率いて江戸湾の喉元である浦賀に来航し開国を迫ったのが嘉永 6 年（1853）、日米修好通商条約を結び鎖国が解けたのは安政 5 年（1858）、その 30 年も前の刊行とあらば想像図だらけであっても合点がゆく。国際化、グローバル化と叫ばれてはいても、日本が世界に門戸を開いて高々150 年しか経過していない。一冊の限定本がいろいろなことを考えさせてくれる。なおこれは、海外のオークションで入手。ユーロが 130 円前後のときに 500 なにがしかを振り込んだ。

気　稀覯本

上記の 2 冊も稀覯本の範疇に入るが、文字通り「稀」というなら、おそらくは天下一本がそれにあたろう。

『日本歴史考古學圖史・甲冑』と題された 4 巻本が手もとにある。これおそらくは天下にひとつ。究極の私家本であり、稀覯本ではないか。専門領域とはかけ離れている書籍だが、愛書家の第六感、そのたたずまいから超のつく稀覯本だと思えて仕方ない。第壱編・概論の刊行年は昭和31年10月6日、一冊 500 ページを超え、重さが 3 キロ以上ある大判、中身はガリ刷（一部は手書き）、題字や扉は直接の墨筆、手書き彩色の施された図版、切り貼りされた写真がにぎやかにページを飾る。筆者は源義彦とある。



『甲冑』（全 4 巻の大判）

この著者、本名なのかペンネームかわからず、かなり探しまわった。結果、どうやら挿絵画家であった人のようだ。『6 年生の学習』（学習研究社）という雑誌の付録「絵とき世界の地理」（昭和 32 年）のイラストを担当したのが同姓同名の人物。その情報を「日本の古本屋」で得て、早速、付録

を入手。見比べてみると、書かれている文字や筆のさばきが『甲冑』のそれと酷似している。

これ古本屋の店内でほこりにまみれていたのを引っぱりだし、場所塞ぎ解消という恩典で、かなり安く買い求めた。数十ページ分がカッターで無惨に切りとられているのが返すがえすも残念なのだが、掘り出しものと信じている。ただし、かなり場所はとる。

古書価が比較的高く、数年前に復刻版の出た『血と薔薇』（天声出版）も、自宅のものは天下一である。なぜなら、この雑誌に連載を書かれていた、蓮の研究で知られるインド哲学者・松山俊太郎と、作家であり翻訳家でもある中田耕治両氏の署名と識語が入っているからだ。女子美術大学に出講していた昔、奇しくもお二人も同じ職場にいらして、その際、無理を言って家蔵の『血と薔薇』を御持ちして、サインをねだった。いつものように講義の合間の昼時間にワインを軽くひっかけ、ほろ酔い加減のお二人にさらさらっと書いてもらった。4 冊目（『血と薔薇』の 4 巻は編集人が違う）を除く 3 冊に、ご両人は文言を工夫して書いてくださった。

耕治先生は、蕪村にも影響を与えた江戸の俳匠、炭太祇（たんたいぎ）の「美しき日和になりぬ雪の上」と書かれた。外がうっすら雪化粧していたからだ。ところが、自らを犬と称され、それを譲らない俊太郎先生の識語はいただけない。はなはだ失敬だが、古書価の高い本に、ありがた迷惑とも言えるこんな駄句に駄文を書かれたのだ。「月蝕や犬がもの書く末世かな／犬山斬猫軒馬鹿也」。しかも、子どもが悪戯書きをしたとしか思えない稚拙な文字である。もちろん当時、岩のように大きく（近頃はだいぶ痩せられた）、若い頃のやんちゃで片腕を無くし、東大の空手部主将と噂され、電車の中で大股開いたヤのつく自由業のオア兄さんが彼を見るなり平身低頭となる強面、はたまた女性の胸に触れることをこよなく愛しその行いを「おっぱいを“盗る”」と自称して無邪気に喜ぶ奇行で名にし負う松山先生ならでは。そう思うと憎めない文字ではあるが……。

かく思いたい

あれもこれもと書き出せば切りがない。アーネスト・サトウの旧蔵書や版画の類にも珍品と信じるものが少なくないからだ。50年も生きていると、積年の宿弊よろしく本もその周辺の品々もたまる。

今回の引越を機に、小型のダンボールで100箱近くの本を売った。本だけでなく、水彩画、版画も売った。藤田嗣治の版画はそこそこの値でさばけたが、結城素明の日本画や瑛九の版画は売れない。木村荘八のこじゃれた絵入りの色紙でさえ二束三文。谷崎潤一郎の書簡は額装が仇となり、手紙ではなく半紙の扱いで、購入額の2割以下の値段で持って行かれた。それでも、新たなリベンジを誓う。

慌てて付言するが、リベンジとは、古書を安く買って高く売り利ざやを稼ごうという商魂のことではない。本当に価値ある書物と邂逅し、けっして手放さない究極の座右の書を求めての己を相手の飽くなき戦いの謂である。とは言いながら、もう誰にも理解も同情もされない領域へと踏みこんでしまっている。されど、今日もまた元気な鹿肉を追い求める。

詩人、荒川洋治は『文学が好き』（旬報社）のなかにしゃれた言葉を記している。

> なにもない。ぼくはそれだけなのだ。文学がないために、見えなくなることは多い。また、人間が見えなくなるときは、文学の姿が消えているときである。そんなふうに思う。それだけなのだ。

この文言の「文学」という二文字を「書物」と置き換えればそれはそのまま自らの心境なのではないか。そう思っているし、かく思いたい。